

平成30年度 双葉町復興まちづくり計画（第二次）の具現化に向けた検討内容

※本資料の記載内容は、町としての決定事項ではなく、幹事会ワーキンググループでの検討結果であり、今後各課での検討結果も踏まえ、実施計画の改定を行います。

2 町内に整備する住宅

帰還する町民や新たな町民の受け皿となる「住む拠点」の環境整備について、JR双葉駅西側の住宅団地を中心とした住宅整備に関するコンセプト（理念）、期待する役割・取組について整理・検討

【コンセプト（基本理念）・取組】

『町民1人1人が主役になり 活躍して助け合う 明るいまち・双葉町』

○居心地の良い、コンパクトなまち

→職住近接で3世代居住や二地域居住など、多様な住まい方を選ぶことができ、暮らしに必要なニーズを住まいの近くで応えられる機能を持った住宅地

優先的な取組案

- ①住宅地から官民複合施設、駅まで歩きやすい歩行空間
- ②生活利便施設、診療所、高齢者支援施設との動線に配慮
- ③多様で多世代が近い距離でライフスタイルに合わせて暮らせる住まい方
- ④空き家を利用した宿泊施設（民泊）の支援

○適度な距離感で住民活動や見守りができる

→程よい距離感で子どもから高齢者まで住む人みんなが見守りあい、支え合える環境に配慮した住宅地

優先的な取組案

- ①住民同士で気配を感じやすい、声かけしやすい住棟配置
- ②いざというときや日ごろの活動で集まることができる公共空間の確保

○世代を超えた生きがいづくりと町外への情報発信（つながり）

→若者も高齢者も地域の貴重な人材となり役割を持つことで生きがいや健康づくり、社会貢献へ展開し、その活動を町外に発信することで町の魅力をアピールできる住宅地

優先的な取組案

- ①住民みんなで花づくりや野菜づくり（生きがい、健康、交流、景観づくり）
- ②住民主体のサロン（談笑・体操）やイベントの開催、情報発信
- ③住民の特技を活かして社会貢献（花づくりや農業指導、介護資格取得、清掃・草刈り活動、民泊支援、介護タクシーなど）

○暮らしを支える仕組みで安全安心、暮らしやすい

→震災前から双葉町を支えていた隣組の再構築や医療・介護事業との連携、防災意識を高める地域活動を通じて、暮らしを支える住宅地

優先的な取組案

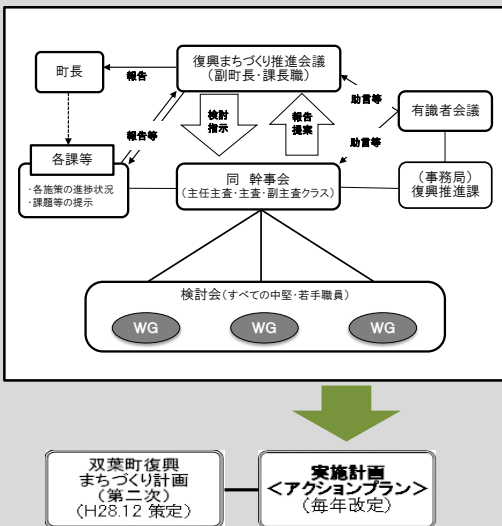
- ①双葉町に根付く隣組のつながりを再構築
- ②防犯対策（交番、街灯、防犯カメラ、警備、登下校の見守り）と防災対策（ハザードマップ、避難計画）、有害鳥獣対策
- ③医療や介護事業者との連携（官民複合施設や住宅内にホームドクターや介護施設）

1 はじめに

双葉町復興まちづくり計画（第二次）の具現化に向けて、庁内共通認識のもと全庁的に取り組むこととしており、以下の体制により各テーマの検討を行った。

また、検討結果は双葉町復興まちづくり計画（第二次）の実施計画（アクションプラン）及び各施策等の取り組みに反映し、その実施はPDCAサイクルによる進捗管理を適切に行うとともに担当各課の連携のもと行うこととしている。

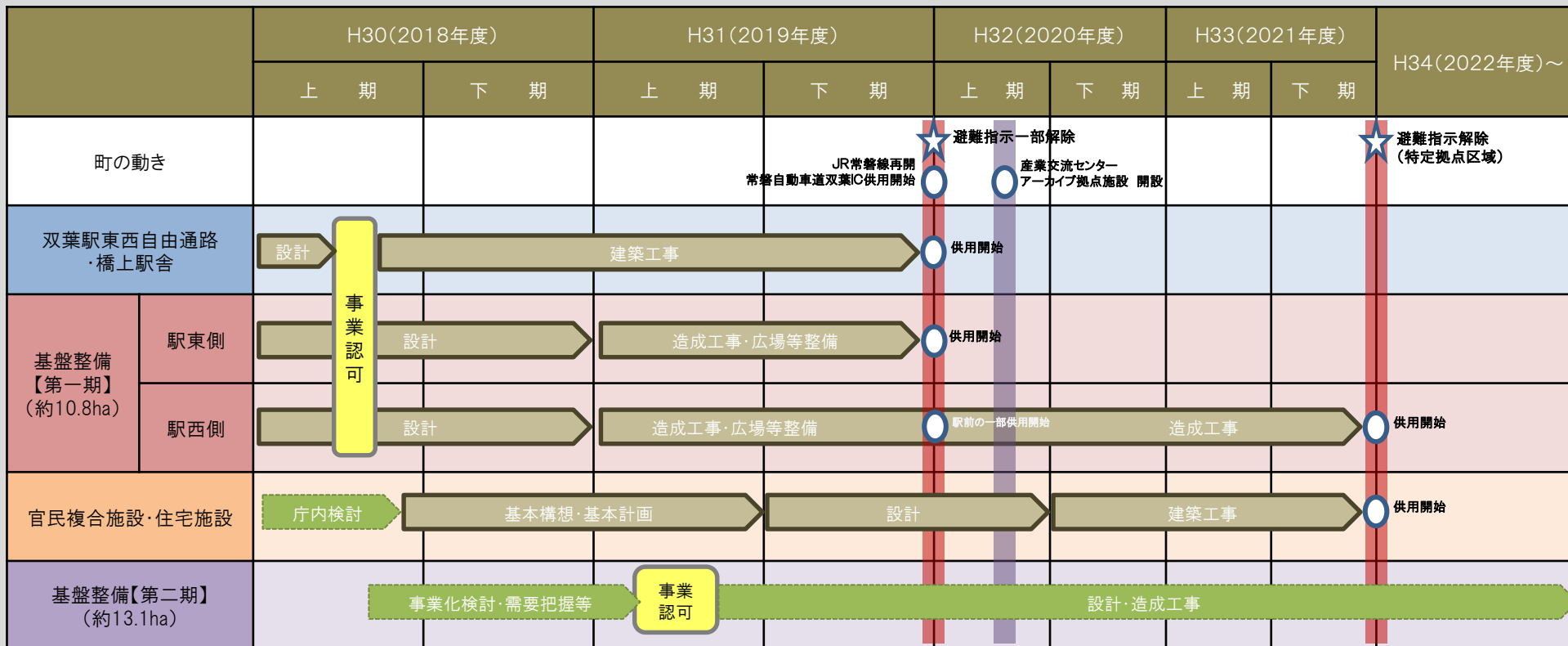
【庁内検討体制図】



【検討会と検討テーマ】

第二次計画	検討WG	検討テーマ
IV章 町の再興	「住む拠点」	町内に整備する住宅（2） 町内（駅西）に整備する官民複合施設（3）
VII章 計画の実現に向けて	「生活交通の在り方の検討」	町内交通（広域含む）の在り方（4）
全WG共通		既存駅舎の活用方法について（5）

【双葉駅舎及び東西自由通路、駅西地区、官民複合施設、住宅施設等の整備スケジュールイメージ】



【有識者意見】

- ・戸建て住宅は、福島復興再生特別措置法により払下げ期間が短縮されており、入居者がいなくなった場合でも有効活用しやすくなっている
- ・地元の工務店が建てられる木造戸建てを優先的に建てるべき
- ・意向調査を行い住む人を把握し、居住者に合わせた基盤整備や公共福祉サービスの体制づくりが重要
- ・住宅の配列には、官民複合施設との連携に配慮する
- ・勿来酒井団地整備にあたっては、様々な工夫が凝らされているので、駅西の整備の参考にすること
- ・モニタリングポストの設置場所や数は計画的に行い、住民が安心して暮らせる工夫が必要
- ・同じ行政区の方向士を近くに配置するなど、既存のコミュニティ・住民同士の繋がりに配慮

【取組状況】

- ・都市計画決定（2018.3）
- ・住宅施設の基本構想・計画着手（2018年度）
- ・駅西地区生活拠点整備基本設計完了予定（2018.10）
- ・駅西地区生活拠点整備実施設計・整備工事着手予定（2018年度下期）
- ・ハード整備のみならず、町民同士の交流等ソフト事業も今後検討
- ・2022年度の入居開始を目標

3 町内（駅西）に整備する官民複合施設

帰還する町民や新たな町民の受け皿となる「住む拠点」の環境整備について、JR双葉駅西側に予定されている官民複合施設整備に向けたコンセプト（理念）、期待する役割・取組について整理・検討

【コンセプト（基本理念）・取組】

『ふらっと立ち寄れる ほっとステーション ～町民主体の 顔が見える 交流の場～』

○生活支援機能を備えた暮らしの総合サービス拠点施設

→地域の暮らしや住まいの情報提供、地域の医療・介護サービスの提供、買い物、飲食などの機能が一か所に集約された施設

優先的な取組案

- ①役場の一部機能、住宅関連情報により町の情報を発信（町の案内所）
- ②帰町者支援、移住者・一時帰町者向け空き家活用による居住・民泊支援
- ③生活利便施設、診療所、薬局、高齢者支援施設、託児機能を配置
- ④地域のニーズを踏まえた商業、飲食施設の導入と移動販売の活動拠点

○住民みんなの得意分野を活かして、みんなが社会貢献できる施設

→住民1人1人が主役となり、お互いをサポート。得意分野を活かして地域の活動をすることで自己実現や生きがいづくり、社会貢献ができる施設

優先的な取組案

- ①生活支援、介護や子育て、園芸・農業、伝統文化など住民が先生になって活躍できる場、活動拠点の提供（託児、園芸・農業講座、郷土料理教室）
- ②若者も高齢者もそれぞれの得意分野を活かしながら働く場の提供（健康づくり、子育て、農業、地域づくり、語り部）

○子どもも高齢者も、帰町者も移住者もみんながつながる交流施設

→憩い、遊び、集い、イベントの拠点で住民同士の顔の見える関係性を強みに、そこにいけば誰かに会えて、新しいけど懐かしさも感じられる施設

優先的な取組案

- ①住民みんなで健康づくり
- ②憩いの場（談笑、囲碁将棋などの趣味活動等）
- ③共同作業を通じた喜びづくり（収穫、工作、伝承等）

○バリアフリー、省エネ、災害に配慮した安全安心な施設

→利用者や環境に配慮した省エネ・スマートなバリアフリー化された建物で、災害への備えが整った安全で安心な施設

優先的な取組案

- ①子どもも高齢者も移動しやすい公共交通の拠点
- ②環境に配慮した省エネルギーで自然エネルギーを活用した建築物
- ③パトロールや有害鳥獣対策、清掃・草刈り活動の拠点

【有識者意見】

- ・駅東側に整備する来訪者公共施設との棲分けが必要
- ・防犯・有害鳥獣対策のため、夜間営業があると良い

【取組状況】

- ・官民複合施設の基本構想・計画着手（2018年度）
- ・2022年度の供用開始を目標

4 町内交通（広域含む）の在り方

2020年春の一部避難指示解除による立ち入り自由化、および2022年春の特定拠点全域の避難指示解除による居住開始に向け、それぞれの時期に必要な公共交通の在り方について検討

また、地域交通は地域社会の活力の維持向上のために重要な要素であることをふまえ、まちづくりにおいて地域交通が他分野の取組とどのように連携し相乗効果をもたらすことができるかについて検討

【広域交通の整理】

（課題）

- ・運営会社、近隣自治体との連携
- ・特急の停車駅（いわき、仙台）との接続を良くする必要がある
- ・浜通り⇄中通り⇄会津地方のルート確保
- ・仙台⇄南相馬⇄双葉⇄いわき⇄関東の運行
- ・浪江町や大熊町、バス会社との調整

（提案事項）

- ・車両の切り離しで双葉駅に特急を停められないか
- ・駅にカフェを併設し待ち時間を快適に
- ・インターチェンジにバス停や駐車スペースを整備

（2022年に向けての留意事項）

- ・JR常磐線：植田～双葉間で一定数の本数を確保
- ・バス：郡山市～双葉 直通バスが必要
- ・勿来酒井など町外拠点との連絡バスが必要
- ・通学・買い物・通院用のバス（楡葉町、浪江町、広野町、いわき市方面）が必要

【町内交通の整理】

（課題）

- ・バス駐車場の確保（用地の取得・整備・管理）
- ・待合所、停留所、自動販売機などの設置

（提案・配慮事項）

- ・出勤・退勤時間に合わせる
- ・バスや電車の乗継時間を短く
- ・駅にカフェを併設し待ち時間を快適に
- ・インターチェンジにバス停や駐車スペースを整備
- ・タクシー兼パトロール車の運行
- ・小型のモビリティや自動運転タクシーの導入
- ・英語や中国語など外国語表記の案内を設置する
- ・復興祈念公園内の移動は公園の目的や意義にかなった移動手段（ゆっくり見て回る）

（2022年に向けての留意事項）

- ・駅西発着の住民用バスが必要
- ・スーパー、病院、学校等への交通の確保

【地域交通と他分野との連携アイデア】

- ・震災・原発事故の遺跡を観光資源として活用（視察コース）
- ・自動運転など先進技術に取り組む企業に対する誘致
- ・住民主体の交通による高齢者の生きがいづくりや自立できる環境づくり、新たな雇用創出に繋げる

【今後の展開】

- ・地域の公共交通確保維持改善に係る計画である「地域公共交通網形成計画」を策定し、“住みやすい”“訪れやすい”双葉町を整備する必要がある

5 既存駅舎の活用方法について

新双葉駅の改札口は東西を結ぶ自由通路上に移動し橋上駅となるため、既存駅舎は駅の改札口としては使用されない。双葉駅の玄関口としてどうあるべきか、既存駅舎の活用方法について検討

【利活用について】

- ・電車の待ち時間を考えると待合機能とトイレは必須
- ・来訪者の多くが立ち寄る場所になること、またアーカイブ拠点施設は県の施設であるため別途双葉町の情報を発信できる場所が必要

【留意・懸念事項】

- ・広さ、高さともスペースが限られているため設置できるものは限られる（例えば、コンビニは高さや広さの制限があり設置できない）
- ・新たにトイレを整備とするなら浄化槽の整備が必要
- ・担い手不足が懸念されるため維持管理に人手がかかるものは難しい
- ・平成32年（2020年）まで期間が限られているため、着手を急ぐ必要がある。
- ・まずは、待合機能や展示スペースとして活用し、担い手が出てきた段階で再検討するなど柔軟な対応が必要。

【有識者意見】

- ・まずは、駅の東側から中野地区の方面に向かう交通を確保することが重要
- ・避難指示解除に向け、人口の少ない地区の住民に対しNPOによる自家用有償旅客運送等の導入を検討
- ・バスなどのルートは、住民へ調査を行い希望を反映するべき

【取組状況】

- ・地域公共交通網形成計画等の町内における交通計画を作成予定（2019年度）

【取組状況】

- ・JR双葉駅東西自由通路・橋上駅舎施設工事着手（2018.8）
- ・既存駅舎改修（2019年度）
- ・2020年春頃までの一部供用開始を目標



新双葉駅と既存駅舎のイメージ

6 その他有識者からの意見

有識者会議における、復興まちづくりの取組に対する有識者の主な意見（2018.8）

【まちなか再生ゾーンについて】

- ・2022年の避難指示解除後の町内住民は、整備が進められている駅西地区だけでなく、まちなか再生ゾーンを中心に同地区以外に帰還する町民が見込まれる
- ・多くの住宅の除染解体が進み、全体が更地化してしまうことが想定される。制度上、空き地になると公的な資金の投入や行政側としての利活用が困難になるので早期着手が求められる（他自治体の事例をみても、効果的な計画をつくるためには、数年かかる）
- ・意向調査を早期に実施し、整備計画や既存建物の利活用方針を策定するべき
- ・住民や地権者への説明を丁寧に行っていく必要がある
- ・開発する際は、既存の公共用地・公共施設を拠点に都市整備を進めるべき

【来訪者対応】

- ・2020年時点の来訪者受け入れ体制が不十分。来訪者数を見積り、それに合わせた整備が必要

【役場整備】

- ・役場整備に対し国補助金の活用は難しいが、仮設で整備を行うなど工夫し、町の負担を減らしていくべき

【学校再開】

- ・町内に住む子どもの数から学校を再開するかどうか検討するとのことだが、学校を先に再開し帰町を促すこともできるのではないか。他の自治体の事例を見ても、学校再開をきっかけに子どもが戻ってきている

【新たなコミュニティの形成】

- ・元町民と新町民の交流やコミュニティの形成を促進できるよう、住宅や施設の配置に配慮すること

【町外居住の方との繋がり維持】

- ・他自治体で取り組む「ふるさと住民票」のように、第二の住民となってもらい、繋がり維持や開拓することも重要